佐々木高政著「新訂 英文解釈考」金子書房 1980 年 3 月 20 日刊を読む

英語の学び方を考える

１．どうしても書かずには気がすまなかったというのが本音である。格好の材料が目の前に鎮座ましましていたから、その昔、まだ学校で英語を勉強させてもらっていた頃、申訳けない話だが授業の方は少々なおざりにして自分の好みにまかせて英語の本を次々と息もつかず読み耽っているうち、こうして本を読破して行くこと自体は愉快だがどうもこのままでは何だか頼りないと感じ出し、ノートをとることを始めたのであった。ちょっとした言葉のひねり方にも一々感心して書き留めるという甚だ幼稚な時代であったが、それでも何年か経って戦争がたけなわになり、わたし自身も二度目の軍服を着せられた頃には、大学ノートで優に 20 冊、細かい字でぴっしり書き入れられていたそれがいよいよ東京、横浜も頻々と空襲を受けるようになって始めて(少々落ち着きすぎて、というより面倒臭かった)本と資料を地方へ疎開させるべきかなと考え出し、兵営からその手配を人に頼んだのが昭和 20 年の春。発送完了の通知を受けとった 10 日後に大空襲があり、川崎の操車場にとまったままだった貨車の中で、あわれ、わたしのそれまでの読書のあかしは灰になってしまった。燃えにくい大学ノートはまだくすぶっていたという。敗戦、そして生きのびるためのけわしい日々が始まった。何もかもなくなって却ってさっぱりした感じであった。新規蒔直しの闘志に溢れた毎日だった。商売替えにも絶好の機会であったが、その才覚にも勇気にもいささかならず欠けていたわたしは今までの道を辿るほかなかった。そこでわざわざ英国くんだりまで出掛けて行き本の買い集め、帰ってから一冊一冊にのめりこむ生活がやっと軌道に乗った。それから 30 年の月日が流れ去った。その間折々の興味の移り変りに応じて拾い出された材料が、たどたどしいタイプでカードに打たれ、生来の物臭さから未整理のまま段ボールの箱につみこまれて行った。その束(たば)をある日いくつか取り出し、始めはパラパラ次第にじっくり読み返しているときだった。これをこのまま捨ててしまっては可哀想…という気持がきざしたのは。それが 6 年前のこと、そして今この「はしがき」を書いているのがロンドンもヴィクトリヤ駅に近いフラットの台所(表通りの道路工事の騒音のすさまじさに裏側に避難)というのであるから事の運びは目まぐるしいばかりであった。

２．そもそもなどと乙に構えるまでもなく、言葉の道は知に棹さすだけでは遅々たるもの、情に流されなければぐんぐん進まない。感激のないところに目覚ましい進歩はあり得ないからである。長年の英語教師としての生活を振り返って一番ぞっとするのは、大部分の学生諸君のいとも朗かな言語不感症を丸出しにした顔、顔、顔の重なりである。言葉の持つ妖しい魔力など恬(てん)として感じない目付きである。半年一年と懸命に説いても、こちらの頭の悪いせいか相手の方か、またはその双方相俟ってか、興味を示し出すのはごく少数、あとの連中はどうして

そんなつまらぬことにむきになるのかと怪訝(けげん)な表情というのが来る年も来る年もの悲しい図絵(ずえ)であった。英語という言葉の修錬を通じて、深く考え細かく感じとる習慣をつけさせようと意気込んでも仲々報われるものではない。英語教師をやったことのある人なら誰も知っていることであるが、禍根は外国語学習の態度そのものに宿っているのである。つまり、英語を味わって読むなどということは始めから念頭になく、いかに日本語に引き直しそれからおもむろに「意味」を察するかに全面的な努力が傾けられるのである。返り読みという言語的曲芸が終始行われる。これは明治以来根強く命脈を保って来た牢固として抜き難い頑疾である。それ以前の何百年にもわたって行われて来た漢文訓読の習慣の自然延長である。これでは味わって読むことはおろか、文意の正しい把捉すら危くなる。そのねじ曲げ、ゆがみすら覚悟せねばならない。これを正しい方向、つまり英語を読んで日本語の浮上して来る前にその意味をとるということへ志向させようと、一人の英語教師がいくら力んでみても、ヘトヘトになって高血圧症状を起こすのがおち。普通は、途中で阿呆らしくなり、いい加減なところで妥協し、「訳読」で、その日を過ごすようになってしまう。そのまた「訳」という奴が水際立った日本語になっていれば原文の感触がかなり忠実に伝えられる筈であるが、日毎日毎のあれこれに始終くたぶれている頭では、そんな頭脳的重労働は注文する方が無理である。教える方がすでに気重く、教わる方はなんとか早くこの時間が過ぎてくれとひらすら構えているのでは、その相乗作用たるや、正に「おぞましい」の一語につきる。

3．しかし、「やむを得ず」と目をつむってしまうわけにはいかない。なんとか望ましい方向に持って行かなくてはならない。それには色々な方法が試みられて来たが要するに、英語を読み書き、話し聴く際にできるだけ日本語の介入を防ぐ、つまり英語のままで理解し発表するということである。日本語への迂回ができぬようにするということである。その「ゆとり」を与えぬよう「早く」読み書き、話し聴かせることが必要なのである。それには相当な期間にわたっての厳しい語学的訓練が必要なのである。

4．そうしたいわばがむしゃらな訓練を他から課されまたは自ら課して始めて英語における言葉の結びつき具合がわかって来る。読んでいて聴いていて次に来るべき言葉がある程度「予測(anticipation)」できるようになる。この「予測」ができるようになるまでには相当の努力の積み重ねが必要であるが決して不可能事ではない。そのもっとも手取り早い道は、言葉の牽引力にしょっぱなから注意することである。この内容をこの言葉を使って言い始めたらそれが次にどのような言葉を呼び出し、更にそれが…といった表現の可能な回路を考えることに頭を向けることである。表現の機微に絶えず目と耳を向けることである。そうした訓練の一助にもと意図されたのがこの本の前半である。

5．日本語でなら言葉遣い一つでその人の育ち、教養、感性から知性まで、またどんな意図、どのような感情をこめて言ったり書いたりしているかがピンピンわかる。それが英語においても出来てほしいという気持が残り半分の陣構えにわたしを向かわせたのであった。読んでその「語気」を適確に捉える触角(antennae)を育てることがもくろまれている。それへの道は、ある内

容をある言い方で決着させている文章を、それに至るまでの頭の中、原稿用紙の上での練り直しを、つまり思考と情感の「揺れ」を及ばずながらできるだけ跡づけることであった。

「揺れ」といえば、言表行為における悶絶という痛ましい心的現象をつぶさに観察するのがひそかな趣味のわたしは、こちらに来ての半年間、もっぱらそれを耳で愉(たの)しんで来た。まず町の普通の人(外国から移入して来た人々が地つきの英国人を数の上ではるかに上回っているのではないかと思われる)の語り口である。ごく簡単な用足しでも単語をバラバラ吐き出し、適切な言葉がパッと浮かばねば‘ you know ’の連発で相手にお察しを請うし、二進(にっち)も三進(さっち)もいかなくなると急拠方向転換、言い直し、繰り返しの連続で強引に持って行く。録音してみれば、ほとんど「文」の態をなしていないことが分明であろう。そのもっとも面白いのが民間放送 IRN(Independent Radio News)である。聴取者が放送局に電話して、言いたいことを言う‘ The Night Line(夜間専用電話) ’というのが夜 9 時から始まり、午前 1 時まで続く。これを受けてさばく担当者はかなり頭の早く働く男女であって、外からの電話の主とのやりとりは正に秀逸ということが間々あった。電話をかけて来る人の方はすでにあがっており､それにまとまった内容をしっかりした言葉で話すことなど日常まずない人々が大半なので、気短な担当者だと訳のわからぬ音の連続としか言いようのないぐずつきにたまりかねて、自分の言葉で引き取って、けりをつけるところなど、聞いていると双方の表情まで目に見えて下手な芝居よりも面白い。それが BBC の Radio 4 になると様子ががらり変わる。同じように一般聴取者からの意見を紹介する‘ Any Answers ’(その何日か前に放送される‘ Any Questions ’という時間に開陳されたパネルの面々の見解に対する賛否両論)では、勿論放送局で投書の文章に綿密に筆を入れるのであろうが、言葉遣い、文章の運び方の上では満点で、聞いていてすらすらわかるし、それを読み上げるアナウンサーもプロ中のプロだから、投書者の憤慨、慨嘆、すべて手に取るようにわかる。この二つを聞き比べていると、時間にせかれて書きとばさねばならぬ新聞の文章の冗漫なお粗末さと、すでに古典として収まっている作品の文章のきりっと締まった秀麗さとの間に感じられる差異に思いが至るのである。

6.「語気」は耳で聞きわけるのは比較的容易である。抑揚、声音というはっきりした「よすが」があるからである。同じ Radio 4 で夜の 10 時 45 分から 15 分間文学作品を何回かにわけて朗読する‘ A Book at Bedtime ’という番組があるが、これを聞いていると作品が急に生気を帯び、人物が動き、語り出すが、活字で読んでいて会話のやりとりにそうしたはつらつさが頭の中で沸いて来るには余程の勉強をし、余程の感応力に恵まれた人だけの至り得る域なのかと絶望した時期があったのを思い出す。そうでもないようなのだ。つまり、感情と言語の微妙な相互関係に心が向きはじめれば誰にだって辿りつき得る域なのである。

7．そうした語学的「予測(anticipation)」能力と感性的「受信(reception)」能力を育てるという二つの目標への踏み石となりたい本書の中の文章はできるだけ濃(こく)のあるものにしようと、平凡なことを平凡にしか言っていないものは気前よく捨てた。今振り返ってみると、わたしたちの身の上に起こるいろいろなことをどのように受けとめ、どのように対処するかを思わず説いてしまったという文章が多いことに気付く。こうした物の考え方、感じ方をした人がいたと

知るだけでも愉(たの)しくなる文章がいくつか見出されるのではないかと思う。繰り返して読むうちに語気がなんとなく感得されるようになって自前で英語の本を読むのが(寝ころんで)愉(たの)しくなったという人がもし現われたら、わたしにとってこんな嬉しいことはない。冥利につきる話であるがわたしはそれをひたすら願う。

8．本の「はし」に一寸失礼させて頂きますと「書く」筈がとめどなくここまで来てしまったが…の点を三つ打ったところで気持がガクンとゆるみ、にわかに「帰心矢の如く」なってしまった。持って帰る品物を旅行カバンにきちんとつめることにしよう。

「はしがき」より

［コメント］

英文解釈の参考書の極地が本書であると私は確信する。1～2年間かけて、毎週1～ 2回、3～4時間本書を一語一語ゆっくりと精読、輪読するような勉強会が日本各地でできたら、多くの人々が英語を自分のものにすることができる。

－2009年6月13日林明夫記－